研究No. 1908

タイ・ユースック村を事例とした社会–空間系の変容過程の研究

―1983年の集落成立から現在まで―

主査　北　雄介*1
委員　伊藤　洋志*2，早川　貴光*3，福田　真澄*4

都市や建築，集落といった空間のあり方は，経済や技術，人々の価値観などといった社会的事象と密接に関係し，「社会–空間系」を成している。本研究ではタイの山岳少数民族の集落・ユースック村を事例とし，この系のダイナミックな変容を詳細に読み解くことを目的とする。本稿では1983年の集落の成立から2022年現在に至る同村の変容過程を，図面作成とヒアリングを中心に調査した。その結果，1992年ごろを境に社会–空間系が大きく変わり，建築やインフラに関する近代技術の流入，精霊信仰からキリスト教への改宗，国外への出稼ぎで得た資金によるコンクリートブロック造建物の急増などが起こっていることを明らかにした。

キーワード：１）社会変容，２）空間変容，３）社会–空間系，４）アカ族，５）山岳少数民族，
６）タイ，７）技術と空間，８）焼畑，９）出稼ぎ，１０）建築材料

TRANSFORMATION PROCESS OF THE SOCIO-SPATIAL SYSTEM IN THE CASE OF YUSUK VILLAGE, THAILAND

-From the Start of Settlement in 1983 to the Present-

Ch. Yusuke Kita
Mem. Hiroshi Ito, Takamitsu Hayakawa, Masumi Fukuda

This study aims to decipher the dynamic transformation of "socio-spatial system" of Yusuk village, a hill minority settlement in Thailand. This paper investigates the transformation process of the village from the start of settlement in 1983 to the present day (2022) by field measurement and interviews. The results revealed that the socio-spatial system changed drastically after 1992, with the influx of modern technology related to construction and infrastructure, the conversion from the belief in spirits to Christianity, and the rapid increase in the number of concrete block buildings built with funds obtained through migrant workers from abroad.

1.　はじめに

1.1　研究の背景と目的

我々の暮らす都市や建築，集落などの空間は，これまで長い年月をかけて変わり続けてきた。その変化の背景には多くの場合，経済の発展，建設やインフラなどにかかわる技術の発展，法律などの制度の整備，あるいは我々自身の価値観の変化など，社会の変容がある。そしてまた，都市や建築などの空間の変容が人々のライフスタイルを変え，地域社会を変えていく。つまり社会と空間とは，分かちがたい一つの系として日々変わり続けている。

この系を「社会-空間系」と呼ぶとすると，その変容は近代化以降に特に加速している。近代的な技術や制度は我々の生活に多大な恩恵を与えてきたが，その一方で，弊害も数多く指摘されている。我が国においては新しい建物が伝統的景観を破壊し，自動車の導入は交通公害を生み近隣コミュニティの解体の要因ともなっている。技術革新と経済成長の象徴でもあった原子力発電所が，我々の生活環境に甚大な被害をもたらしたことも記憶に新しい。近代の技術や思想は，その後の何十年，何百年という時間の中での我々の暮らしへの多大な影響力を想像できず，安易に受け入れられてきた節もある。アレグザンダー[文1)]は，現代社会は複雑さを肥大化させ，デザイナー個人の認識能力をはるかに超えていると指摘している。急激に変化する社会とどのように向き合って，我々の暮らす空間をつくりあげていくかということは，現代の空間計画者にとって重要なテーマである。

このテーマの探求のためにはまず，社会-空間という複雑な系の振る舞いや，それを人がどのように感じとり，空間や社会をデザインしているのかを知ることが肝要である。ただし，ブローデル[文2)]が同様な関心の元で読み解いた16世紀の地中海世界に比べ，現代では社会-空間系の変容は地球規模で連鎖し，その捕捉は困難である。また

*1 長岡造形大学 助教 博士（工学）*2 ナリワイ 代表 *3 株式会社タテイシ広美社 *4 株式会社土井工務店

分析の網を広げることは，我々の生活空間のスケールからの大きな乖離を意味する。そこで本研究では，タイの山岳少数民族の暮らすユースック村（以下「Y村」）という一つの集落を対象として，社会-空間系の変容を追う。そして空間と同様に時間の上でも解像度を上げ，10年の時間をかけてじっくりと経年変化を記録する。このローカルな一集落のケーススタディから，社会と空間の変容，そして人々の暮らしとの間のダイナミックな関係性の一端を明らかにすることが，本研究の目的である。

1.2 既往研究と本研究の位置づけ

柳田國男が1934年から36年にかけて調査した我が国の集落を，50年後に再調査した成城大学民俗学研究所による研究[文3)]は，約100項目に渡る社会風俗の変化を21カ村にわたって追っており，参考になる。同様の調査を空間に着目して行なったのが，今和次郎が訪ねた民家を90年後に再調査した瀝青会による研究[文4)]である。本研究はこれらよりも短いタイムスパンではあるが高い解像度での定点観測を行なう点や，社会-空間系の全体の捕捉を試みる点に独自性がある。

アカ族に関しては，アカ族の村に長期間滞在しながら，精霊信仰やその慣習と居住空間との関係性，およびその変遷などを詳細に調査した清水郁郎による一連の研究[文5)]，伝統的な居住空間の構成原理を明らかにした新井らの研究[文6)]がある。これらはいずれも，アカ族の集落の社会-空間系を記述したすぐれた研究であるが，どちらかというと伝統により成り立った，静的で安定した系を記述の対象としている。その意味では，本稿第3筆者である早川らが行なった，アカ族の村における近代化の影響を調査した研究[文7)]が，本研究の関心により近い。早川らは6カ村における2016年時点での都市化の度合いを地理的条件や建築材料などによって独自に評価したが，本研究では早川らの調査から一歩踏み込み，Y村に絞ってその変容過程を詳細に追うものである。

1.3 本稿の内容

本研究ではY村において，実測とヒアリングを中心とした調査を概ね10年間実施することを計画している。データを1年または2年おきに取得し，社会-空間系の変容をリアルタイムに記録し，分析していく。

本稿では，10年間の研究全体の基礎を固めるため，集落の現在までの変遷と，現状とを明らかにする。またそれに基づいて，今後10年間の研究方法を確立する。具体的には，Y村の概要と空間構成の把握（2章），集落全体のこれまでの変遷と現状の把握（3章），そして集落内の一つの通りにフォーカスした，世帯ごとの詳細な変遷と現状の把握（4章）を行なう。そして5章にて，全体を通じた考察をする。なお本稿にかかる現地調査は，2019年9月（以下「第1回調査」）と2022年8-9月（以下「第2回調査」）に行なった[注1)]。

2. 研究対象としてのユースック村

2.1 村の概要

Y村は，タイ北部・チェンライ県の山岳地帯に位置する集落である（**図2-1**）。村全体での高低差が60m以上あり，伝統的家屋は竹でできている。中国の雲南省にルーツをもつ少数民族・アカ族の人々を中心とした，約500人が暮らしている。元々は焼畑による移動耕作のため，また紛争や迫害から逃れるために，居住地を変えながら暮らしていたが，1983年から現在地に定住を始めた。タイの国内外に広く分布するアカ族の集落の中には，その伝統を活かして観光地化することで外貨を得る道を選んだものもあるが，Y村はそうではない。ここを訪れる観光客はほぼ皆無で，現在も主に農業を営みながら暮らしている。

2.2 研究対象としての選定理由

現在，主要都市から遠く離れたこの村にも，さまざまな変化が波及してきている。コンクリートブロック造などの新しい建築技術の導入や，精霊信仰からキリスト教への改宗，海外への出稼ぎの増加などにより，村の社会や空間は急激に変わりつつある。また伝統住宅は竹や木といった簡易的な材料でつくられているため，更新のサイクルも早い。本研究の対象としてY村を選ぶ最初の理由が，この点にある。現在進行形で起こりつつある社会-空間系の変容を，リアルタイムで観察する絶好のフィールドなのである。

理由の二点目は，この村の立地である。村は都市部からは遠く離れている上に，山や広大な畑地に囲まれて独立性が高く，他の集落に行くためには，一度村の外にある幹線道路を介する必要がある。村の内外が明確に分かれているため，村を社会-空間系の一つの単位として扱うことができ，また社会や空間の変容に対する内部性の要因と外部性の要因とが峻別しやすい。

そして第三の理由が，筆者らにとっての研究環境が整っていることにある。空間や社会に関する詳細な調査は，集落の住民が外部者による調査活動に理解を示してくれないと行うことはできない。しかしこの村の出身で，日本語の堪能なスミオ・アソー氏が，本稿第二筆者の伊藤

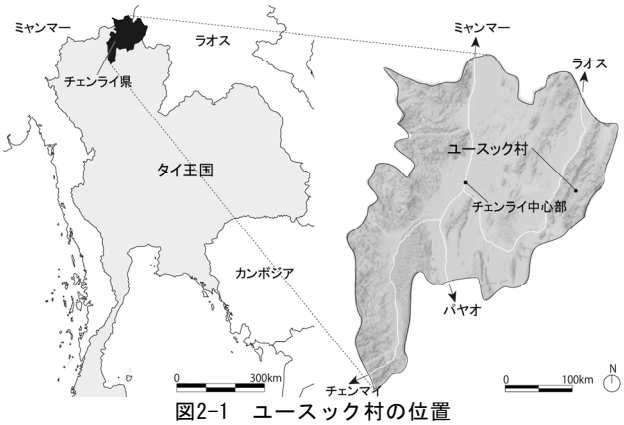

図2-1 ユースック村の位置

とともに，伝統的な竹の家の建設を住民たちから学ぶ日本人向けワークショップツアーを2014年より開催しており，村として日本人の受け入れに理解がある[注2)]。今回もアソー氏が研究コーディネーターの役割を引き受け，住民への協力を取り付けてくれた。またアカ族はアカ語を母語とし，タイ語の通じない住民も多いが，アソー氏が通訳をしてくれることで言葉の壁も大きく下がった。

ただしアソー氏の存在があってもなお，住民たちとのコミュニケーション手段が限られる。アカ語には文字がないため，質問紙調査もできない。

2.3 村全体の空間構造

筆者らは本研究に先立つ2018年の渡航時に，村の一部の立面図（**図2-2**）を作成した。ここに明らかなように，村は急斜面に立地しており，空間の立体的把握は研究において重要である。また村には測量に基づく既存の地図が存在せず，調査のベースマップの作成が必要となった。そこで筆者らはGPS受信機とGrasshopper（3Dモデリングソフト Rhinocerosのプラグイン）を用いた独自の手法を開発し，第1回調査にて実測調査を行なって，ベースマップを作成した（**図2-3**）[注3)，文8)]。

このベースマップは立体地図となっており，高低差の大きい村の空間を把握できる。標高の一番高い主尾根に幹線道路が通り，そこから北に脇道を降りてY村に入ると，支尾根上に3本の主要な街路（**図2-3**内のA,B,Dの通り）が走る。家屋は主にこの3本の街路に沿って立ち並び，尾根筋同士をつなぐ街路は2本のみである。谷筋には木々や竹が生え，小さな沢も確認できる。

2022年9月現在，集落は94世帯の住居と1校の学校，2軒の教会から成り立っている。食品を販売する小規模な商店は3軒あり，いずれも住居と併設されている。

図2-2　2018年に作成した，村の一部の立面図

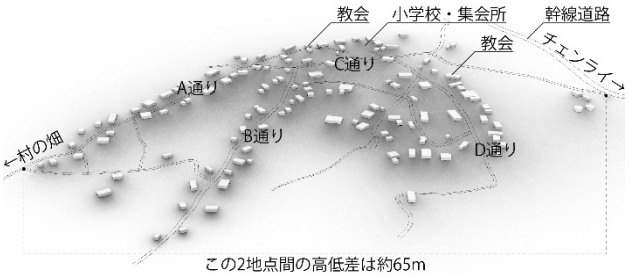

図 2-3　村の西側からの鳥観図

3.　村全体の変容と現状

3.1 年表および集落全体図の作成

村全体の社会-空間系のこれまでの変容過程を明らかにする。調査内容は以下である。

第1回・第2回の両調査において，1983年に最初に居住を始めたうちの一人であり，村長も歴任したL氏，Y村に生まれた研究コーディネーターでもあるアソー氏，その他数名に対して，村全体の歴史についてヒアリングを行なった。それを元に，年代がおおよそ特定できる村内での出来事を抽出し，年表を作成した（**表3-1**）。

第2回調査では**図2-3**をベースとして，母屋以外の小屋等も含めた全建物に対して，目視も交えながら簡易的に測量し，写真および全方位カメラの動画で外観を撮影した。また**図2-3**時点で不正確であった建物の再測量も行なった。そして可能な限り家主にヒアリングを行ない，世帯構成，居住開始年，現在の母屋の建築年，出稼ぎ者の有無を調査した。家主が不在の場合はアソー氏に尋ね，できるだけ情報を集めた。これらの調査結果をマッピングし，**図3-1**の集落全体図を得た。

以下，特に着目されたトピックについて詳しく述べる。

3.2 集落の形成過程

まず**図3-1**を概観する。集落は標高が高い主尾根側から下の方へ向かって形成された。1983年に居住を開始したのは9世帯で，2000年代に入ってから移住してきた世帯も見られる。形成初期の住居に現在でも住み続けてい

表 3-1　ユースック村の主要な出来事の年表
（下線・イタリックは生活技術関連）

年	出来事
1983	L氏ら9世帯がY村へ移住し，先住者である中国国民党の軍人と村を形成
1985	村にジュマ（呪術師兼暦師）がいるようになり，精霊信仰で重要な，村の内外を分ける門をつくる
1988	さらに複数世帯がY村へ移住，以降少しずつ移住者が増加する
1989	双子を忌む信仰（精霊信仰に由来）が消滅する
1991	*家屋の建材に木の使用が始まる*
1992	アカ族世帯のみで行政上村と認められ「Y村」という名の村が成立 *各戸への電気，水道の供給が始まる* *母屋から台所の機能が分離し始める* *便所棟の建材にブロックの使用が始まる* *テレビ，冷蔵庫，固定電話の所有が始まる*
1994	*車，バイクの所有が始まる*
1996	*村内道路の舗装工事が始まる*
1999	キリスト教に改宗 中国軍人がいなくなる 病院への通院が始まる *コンクリートブロックの家を建て始める* *チェーンソーの所有始まる*
2000	国外への出稼ぎが始まる
2002	*携帯電話の所有が始まる*
2004	病院への通院，病気を患う人が目立ち始める
2009	*スマートフォンの所有が始まる*
2012	村内の麻薬依存者による窃盗が発生する *コンクリートブロック建築，工程ごとに施工者が異なる*
2016	5世帯がキリスト教から仏教に改宗
2019	家庭ゴミの回収を開始 *Wi-Fiスポットの設置*

る世帯もあり，生活環境の変化や建築技術の変化などに応じて改築を実施している。

集落内での建物の配置と材料の関係を見ると，竹を用いた伝統的な建物は集落の比較的奥の方（**図3-1**で左側）に多く，集落の形成過程上の中～後期に建てられている。形成過程上初期にあたる，集落の入口側は，モルタルや塗装で仕上げられたコンクリートブロック造（以下「F-CB造」と記す（FはFinishedの意）。コンクリートブロックのままの仕上げは「CB造」とする）の建物に建て替わっているものが多い。集落内の住居以外の建物である学校や教会も，F-CB造でできている。

3.3 建築材料の使い分けと変遷

この建築材料というテーマに，さらに踏み込んで論述する。住居の各世帯は，母屋の他に離れや小屋，便所，東屋などの別棟から成り立つ分棟形式が多く見られる（全94世帯中68世帯）。この棟ごとの違いに着目しながら，材料の変遷を詳しく記す。

なお年表を特に技術について見ると，1992年が一つの区切りとなる。この年，アカ族の住人のみで行政上も村と認められたこと[注4)]に伴い，村内のインフラ整備のための予算も生まれ，次第に村に新たな技術が導入され始める。そこで本節と次節では，1992年を区切りとして，生活技術の変化を捉えることとする。

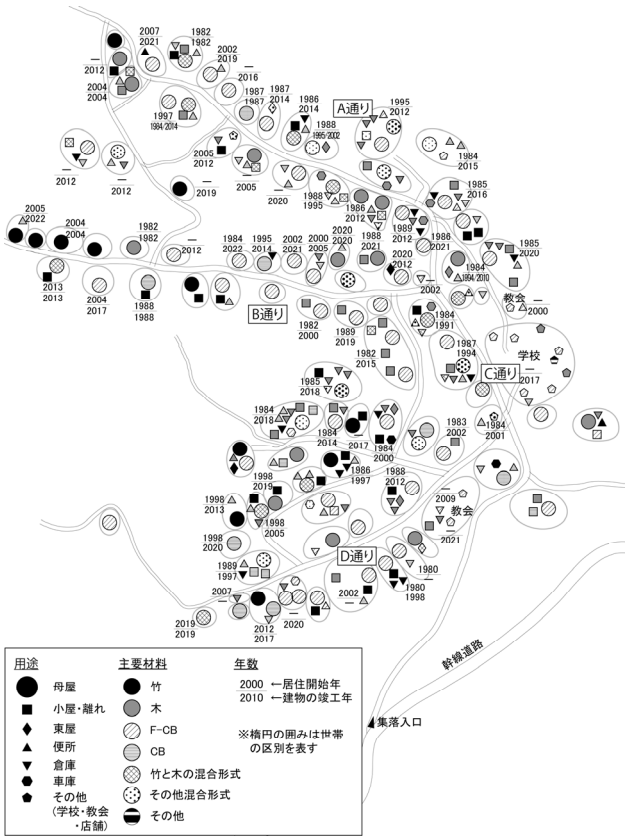

図 3-1　建築の用途と主要材料，建築年のプロット

3.3.1 移住初期（1983年～1992年頃）

竹と茅を材料とした伝統的な住居が，村人たちによって建てられた。高床式，地床式（**写真3-1①**）の両方があり，地床式の方が多い。その理由はいくつかある。まず1つは防火のためである。村人の多くは農業に従事しているため，留守にする家の火事を心配し，より防火性の高い地床を選んだという。それ故，在宅する老人が同居する家の場合は，高床を選びやすいという状況であった。また，地床の場合は高床に比べて少ない材料と手間で建てることができる。さらに，精霊信仰によるルールでは，高床式の家を地床式に建て替えることはタブーとされ，逆に，地床式から高床式への建て替えは許されたため，地床式が選ばれることが多かった。

屋根は茅葺であり，茅を2つ折りにし割竹を芯にして編み込んだパネル状の屋根材を使用する。その耐久性は長くても3年であり，嵐などの自然災害もある。葺き替えに備えて軒先にストックされるパネルは，現在でも見ることができる。

便所は母屋とは別棟に作られた。母屋と同じく，材料は主に竹と茅である。便器はなく，地面を少量のセメントで固めた場所に排泄する。排泄された屎尿は，パイプを通り，便所棟外の地面に掘った穴に貯められた。

3.3.2 発展期（1992年～）

竹や茅の使用は継続しつつ，新たに，木とトタン・スレートが使われ始める。森から切り出した木は，柱などの主要な部材，板に加工し床や外壁に使用。トタン・スレートは市場で購入し屋根材とした。木材の使用率が高いトタン・スレート葺住居の出現により，耐久性が向上し，維持管理の手間も減少した。しかし，屋内で調理をする際の排煙がうまくいかず台所だけを別棟とする様式が現れる。便所・浴室棟は，多くの住居でブロックを積みトタン・スレートの屋根を架けた簡易的な構造で，意匠面にも似た造りになってくる（**写真3-1②**）。水道配管工事が進み，便所・浴室棟へも直接水が供給可能となった。また，屎尿を貯めるための穴には便槽が埋められた。便槽に底はなく，土壌浸透させて処理しているのに変わ

①地床式の竹の母屋　②CB 造の便所　③既製コンクリート柱　④F-CB 造の母屋　⑤コンクリートの施工の様子

写真 3-1　建築と材料に関する写真

りはない。

1999年にはCB造やF-CB造の母屋が建設され始める。施工者は村外の専門の職人である。また，木造家屋においても市場で購入可能なプレキャストのコンクリート柱（**写真3-1③**）など，さらに建築材料の多様化が進んだ。

3.3.3　現在（2022年）の状況

以上の変遷を踏まえて**図3-1**の現状を再び見てみる。

F-CB造は，母屋で採用されることが圧倒的に多い（**写真3-1④**）。F-CB造による建物は構造（1層／2層）・意匠（外観に使用する色彩や開口の設置）共に，各世帯で相違が見られる。特に，近年竣工した建物では，外壁に彩度が高い水色や橙色を使用するものも見られる。

第2回調査時，F-CB造による新築，増改築工事が村の数カ所で同時に行われていた。その多くは以前から村に居住する者の住居であるが，村外からの移住者のための新築工事もある。村内在住の大工や，村外の大工が村に泊まり込み建設している（**写真3-1⑤**）。約10年前までは，屋根，床，塗装など，施工内容によって作業者が異なる形態をとっていたが，現在は一貫してほとんどの工程が同じ作業者によって行われている。その変化はチェンライの都市部と同様だという。ブロック塀の上塗り程度であれば，コンクリートは手で練る場合もあるが，コンクリートミキサー，ミキサー車も利用されている。また，電動の鑿岩機，水平器，市場で販売されているビデ足場なども使用している。

伝統的な竹による構造は，離れや小屋，東屋，倉庫など，母屋に付帯する用途に多く採用されている。ただしF-CB造と違って構造・意匠の面で各世帯で類似性が見られる。木材は母屋，離れ，倉庫などに満遍なく採用されている。近年でも，排煙の解決のために台所を別棟，もしくは軒下に構えている場合が多いが，多くは木や竹でつくられる。母屋においても急を要する場合，コストを抑えたい場合には同様の材料によって地床の住居が建てられている。便所兼浴室は別棟の場合と，母屋の中に設けられる場合とがある。別棟の場合，CB造の採用が圧倒的に多い。

3.4　建築材料以外の生活技術の移り変わり

3.4.1　電気，家電製品

移住初期（1983年～1992年頃）には，カーバッテリーに充電してテレビを使用した。一般家庭にはなく，村内の売店が所有しており，商品を購入したらテレビ視聴が叶うというものだった。

発展期（1992年～）には，各戸へ電気が供給され始める。これにより，電気代負担のため，現金収入の必要性が高まる。テレビ，冷蔵庫の家電類も普及し始める。

2022年現在，家電の利用率は家により様々であるが，白熱灯や蛍光灯などの照明，冷蔵庫，調理家電，洗濯機，扇風機，浴室での電気温水器（**写真3-2①**）の利用が目立つ。また，小型のソーラーパネルによる発電で，軒先の外灯を点灯させる例も第2回調査で見られた。

3.4.2　水道

移住初期（1983年～1992年頃），各戸への水道は供給されておらず，水場へと足を運び水を汲み持ち帰る。発展期（1992年～）には水道工事が進められ，村全体の水源タンクから各戸の貯水タンクへ水が送られる設備が整う。2022年現在，調理，洗濯，排泄，水浴びにおいて水が利用されており，これまでと大きな変化は見られない。

一番簡素な設備の家では，貯水タンクから水道管を伸ばし，屋外に1箇所のみ水栓を設けている。便所棟にある水瓶まで給水が必要な時には，水栓にホースを接続し使用する。生活に必要な水の利用はその2箇所で全て行われている。村全体においては，母屋，別棟の台所に水道はなく屋外や軒下などの半屋外に水栓を設置する場合や，別棟の台所内に水栓を設置し洗い場を設ける場合（**写真3-2②**），F-CB造の母屋の中に，便所，浴室，洗面台を設ける場合など，いくつかのパターンがある。共通して，便所浴室棟には水栓を設けるのが一般的である。

水道管の配管はほとんどの場合，むき出しであり目視可能である。敷地内の貯水タンクから自在に配管されており，排水については敷地内の谷側方向へ排水用の管を伸ばし，土壌浸透させている。

3.4.3　調理

移住初期（1983年～1992年頃）には母屋の中に囲炉裏が設けられ，調理に使用された。発展期（1992年～）には，調理の場が母屋から，別棟に移り始める。

2022年現在，加熱調理の燃料には，ガスと薪を併用する例が多くみられた（**写真3-2③**）。薪を使用する場合，囲炉裏で鉄製三脚（カナワ，五徳）を使用するよりも，

①浴室内の電気温水器

②台所棟に設置された水道

③ガスと薪の併用

④苗木と茅製の屋根材を積んで圃場へ向かうピックアップトラック

⑤ガソリンスタンドで給油する子供

写真 3-2　生活技術に関する写真

土製や鉄製のコンロが好まれる傾向がある。コンロのほうが熱効率が良く薪が少量で済むという。また，ガスコンロはプロパンガスを燃料とし，五徳が1口と2口のタイプが使用されている。

また，囲炉裏が消失し屋根が金属製に変わっても，土製や鉄製のコンロの上に火棚を設ける習慣だけが残っている場合がある。本来，火棚は火の粉が茅葺の屋根まで届くのを防ぐ為，食品や道具類を乾燥させたり燻したりするのを目的に使われる。現在のY村においては，未使用の竹製背負いカゴや，食品が火棚に置かれているのがよく見られた。

籾摺り，精米も機械化され，伝統的な足踏み式の臼を使用する文化は消滅している。米の調理は，丸太をくり抜いた蒸篭で蒸す方法が一般的であったが，電気炊飯器で炊く機会が増加している。

3.4.4 情報技術

移住初期（1983年～1992年頃）は，前述の通りカーバッテリーを利用してテレビを見た。発展期（1992年～）には，村に固定電話が置かれ，使用料を払って利用した。各戸への固定電話の普及はないままに，2002年には携帯電話，2009年にはスマートフォンの所有が徐々に始まった。また，テレビやラジオも各戸へ普及している。

2019年には無料Wi-Fiスポットが設置された。また，日没後には自宅でスマートフォンを利用し，ビデオ通話や，動画サイトを楽しむ姿がよく見られる。

3.4.5 交通

移住初期（1983年～1992年頃）は移住時に車両を所有している村人はおらず，車をレンタルするなどして移住した。発展期（1992年～）には1994年，自動車，バイクの個人所有が始まる。1996年から道路の舗装工事が始められており，近年まで継続している。

2022年現在，バイクの所有率は車に比べて高く，高齢者を除く多くの世代で利用されている。高低差が大きく斜面が多い村内において，移動における大きな役割を果たしている。車はピックアップトラック（**写真3-2④**）が好まれ，農作物や薪などの物資の運搬，人の移動など，荷台の利用頻度が高い。農業従事者の移動手段は徒歩，バイク，車，トラクターに乗車するなど，様々である。また，村内にはガソリンスタンド（**写真3-2⑤**）が設置されている。食品，寝具の移動販売車，建設や電気工事関係の作業者の車，ミキサー車，村外の友人知人の車，バイクのなど，住民以外の車両の往来が日常的にある。

3.5 村の外部との関係

3.5.1 近代国家との摩擦

Y村の成り立ちは軍事的な圧力による移動が主なきっかけとなっている。軍事的圧力とは具体的には次の2点である。一つは長らく軍事政権が続いていたミャンマーの国軍による食糧の略奪などの迫害行為，もう一つはミャンマー国軍と戦う少数民族ゲリラからの強制的な徴兵行為である。この2点が現住民がY村に移住してきた第一の理由である。次なる理由は各種環境要因によって生じた農地不足である。アカ族は近代以前は中国，近代ではミャンマー，タイいずれにおいてもマイノリティであるため国家の都合で居住環境の悪化にさらされ，移動してきた。タイ国内においては，「1980年台初頭から焼畑に対する規制が強まり，その後バンコクで起こった大規模な洪水を契機として，1989年１月には森林伐採を全面的に禁止する法律1989年１月に制定された」という[文9)]。こうして農地の固定化が求められ，以前のように村ごとの移住を繰り返しながら焼畑対象地を広範囲で循環させることが難しくなった。他方，ミャンマーでの紛争は続いており，移住者数が増え，手狭になる村が出てきている。本来は，焼畑農業は持続性の高い循環型農法であるがタイ国社会のみならず一般的にいまだ森林破壊の典型だというイメージで捉えられているためか，アカ族が望むような規制緩和はなされていない。

3.5.2 宗教

アカ族は精霊信仰を持っているとされるが，近年はキリスト教などへの改宗が進行している。Y村でも村が成立した1983年から16年後の1999年にキリスト教への村人全員での改宗が行われた。改宗の主な理由に関して村人に聞き取りをすると，精霊信仰によるしきたりが煩雑で，儀式かかる費用と時間が重荷になってきたことなどを各自が語る。現在も一夫多妻制は一部に残っているが，若い世代では確認できず実例は少ない。一方で，始祖スミオから現在に至るまでの血統を暗記する風習は現在のところ健在であり，サブグループであるウロ，ロミ，パ・ミの区別も続いている。

また，2016年ごろには生活に馴染んだ風習や自宅の装飾などの個人的な趣味までも牧師から指導が入ることなどになじめずキリスト教から仏教に改宗する家庭も出始めている。

3.5.3 出稼ぎ

Y村の空間変容に最も大きい影響を与えていると思われる行為が国外への出稼ぎである。20,30代が主な出稼ぎ主であり，出稼ぎ先として韓国，台湾，近年ではイスラエルなどが選ばれている。それぞれ就労許可の取りやすさと賃金の差があり，人づてに情報を得て出稼ぎに出ている。工場や農場での賃労働が多く期間も2-3年が多いが，複数回行なったり一回が5年以上のケースもある。聞き取りからは，漠然とお金を貯めるという意図ではなく，家を建てるため，車を買うためなど明確な目的を持って出稼ぎに行っている傾向が認められた。Y村では2019年から2022年の3年間だけでも10軒弱のF-CB造住宅が建てられているが，これらはほぼ全て出稼ぎによって得られた資金で外注施工で建設されている。場合によっては

出稼ぎ中に資金が溜まり次第送金し出稼ぎ者本人が不在のまま建築が始まる。家族の年長者が住む場合でも資金調達者の子息の意向を中心としてプランが決められ，台所小屋，東家など付属施設に関しては年長者の要望が反映されること多い。

4. 世帯ごとの変容と現状

4.1 各戸年表・技術リスト・配置図兼平面図の作成

前章で村全体の変容過程を概観できたが，本研究では多様な生活技術や，一つ一つの変容の詳しい過程や要因にまで踏み込んだ，解像度の高い分析を目指す。そこで第2回調査において，村の中心部を通る**図3-1**内のB通り周辺の26戸に対象を絞り詳細調査を実施した。

まず全戸の家主にヒアリングした。前章と同様の内容の他，Y村に移住する経緯，移住してから現在までの主なライフイベントや建物の建築・増改築の履歴，村への思いなどを聞き取った。それを元に，各戸のライフヒストリーを示す年表（**表4-1**）を作成した。

次に各戸で用いている生活技術を，目視およびヒアリングによってリストアップした。そして生活技術を6項目に分類し，**表4-1**に加えた。とくに生活技術の特徴が目立つ設備，道具を記している。

また全戸の建物および外構の測量を行なった上で，写真および全方位カメラの動画で撮影した。建物については，可能な限り屋内に立ち入って調査した。一部の家屋については，3Dスキャンによって立体モデルを取得した。それを元に，**図4-1～3**の配置図兼平面図を作成した。

なお本稿では紙幅の都合上，性質の異なる3つの家―精霊信仰に由来する古い住居形式を残すB家，村の初期に居住を始め改築や増築を重ねるY家，近年F-CB造の母

表 4-1　3 世帯のライフヒストリーと，2022 年現在の生活技術の導入状況

	B家	Y家		R家
		親世帯	娘世帯	
1940s		*1941. 夫ミャンマーにて出生.* ラフ族がミャンマー国軍と戦争中 *1944. タイ国メブ村へ移住* *1949. 妻出生*		
1950s	*1954. 妻出生（ミャンマー）* *1955. 夫出生（ミャンマー）*	1954. 中国語を習得 1956. 長女出生（前妻と？） *1959. タイ国マチェ村に 28 軒で村を開く*/次女出生		1953. 夫出生 1957. 妻出生
1960s		1962. 三女出生 1965. 四女出生 1968. 長男出生	*1962. 三女としてマチェ村にて出生*	
1970s	1973. 結婚 1974. 長男出生 1976. 次男出生	1971. 次男出生 *1972. ラフ族の徴兵からマチェ村は離村. ロゴ村へ三世帯で移住*		1974. 長男出生 1978. 長女出生
1980s	*1984. ワァメカム村へ移住*(王室 PJ のため土地利用の制限が発生) 1986. この頃馬交通あり，のちにバイク 1989. 長女出生	*1989. ロゴ村が三十世帯に拡大，王室プロジェクトにより土地が手狭になりY村に移住，竹の家を新築* 当時家族 8 名（?）	不詳年. 結婚 1980. 長女出生 1988. 長男出生 *1989. Y 村に移住*	1980. 次女出生 *1982. ジャロ村から Y 村へ移住*，竹の家に住む/次男出生 *1983. ジャロ村へ戻る*（Y 村は親戚がいるためしばしば訪問） 1985. 三女出生
1990s	1995. 次女出生 1997. 四男出生	1990. 村のリーダー（～2022） 1992. 息子が麻薬で土地を売るなど	*不詳年. ミャンマー人アカ族と再婚，移住* 1995. 次男ミャンマーで出生 1998. 三男ミャンマーで出生	
2000s	2000. 牧師の指導で祭壇を破棄 2003. 息子が Y 村へ移住 *2004. Y 村へ移住*, 竹の家を新築. これはアカ族の主な移住の最終世代. 家族 6 名（夫妻. 子 4 名）	2002. Y 村が村として独立. 副村長になる～2007 (村長ともう一人の副村長は中国人) 2007. 半年間村長（以後 L 村長） 2009. 木造高床式に建替え		*2002. Y 村に移住，竹の家を新築する*
2010s	2019. ドリルドライバー購入	2019. 木造平屋に減築		2010. 木造基礎に変更，竹壁，茅屋根，囲炉裏は維持 2017. 屋根をトタンに変更. 煙対策のため台所小屋を建築
2020s	2022. 移住して 18 年, 男女別の囲炉裏を保持	2022. 現在ロゴ村は 100 世帯に成長コーヒーや茶栽培	*2022. 夫死別，Y 村に U ターンし単身住宅新築*	2020. 三女台湾へ出稼ぎ 2022. F-CB 造家屋新築
電化製品	照明，冷蔵庫，テレビ，バッテリードリルドライバー	照明，冷蔵庫，テレビ，縦型洗濯機，携帯電話，炊飯器，電気温水器，ラジオ，扇風機，精米機	照明，冷蔵庫，二層式洗濯機，スマートフォン，炊飯器，電気ケトル，ミキサー，扇風機	照明，冷蔵庫，テレビ，縦型洗濯機，スマートフォン，炊飯器，電気温水器，扇風機，換気扇，ソーラーパネル外灯
水道	屋外に水栓 1。便所・浴室棟へは，水栓にホースを接続し給水。	屋外に水栓 3，便所・浴室棟に水栓 2 とシャワーがあり，洗濯機へは水栓にホースを接続し給水。	水栓は台所内 1，屋外 1。便所・浴室棟へは屋外水栓にホースを接続し給水。洗濯機へは屋外水栓から給水。	屋外に水栓 3。母屋内では手洗いシンク，シャワー，便所。屋外の便所・浴室棟。洗濯機へは屋外水栓から給水。
ガス	なし	台所棟にプロパンガス（1 口）	台所にプロパンガス（2 口）	母屋の地下にプロパンガス（2 口）
メディア	テレビ，ラジオ	テレビ，ラジオ，携帯電話	スマートフォン	テレビ，スマートフォン
車両	なし	バイク 1	なし	バイク 1
生業に関する道具	ナタ，オノ，カマ，カタテクワ，ノコギリ，チェーンソー，バッテリードリルドライバー，銃，鍛冶道具一式	ナタ，オノ，カマ，オオカマ，カタテクワ，精米機，筌	ナタ，カマ，手縫い縫製道具	ナタ
加熱調理道具	囲炉裏（男女それぞれに 1），鉄製三脚 4，土製コンロ 1，火棚	冷蔵庫，1 口ガスコンロ 1，土製コンロ 2，鉄製コンロ 1，火棚，炊飯器	2 口ガスコンロ 1，土製コンロ 1，炊飯器，電気ケトル	2 口ガスコンロ 1，土製コンロ 1，鉄製三脚 1，火棚，炊飯器

屋を建設したR家―についてのみ図表を掲載する。

4.2 B通りの居住者の概観

移住初期（1983年～1992年頃）は前村長L氏をはじめとした世帯である。この時点では，ベトナム戦争に協力したことにより国籍を得た中国人が居住しており，アカ族側のリーダーは中国語が話せる人物が選ばれた。開拓初期は，不発弾が残っているため焼畑の要領で野焼きを行い意図的に爆発させて除去したという。厳しい生活条件のためか初期開拓者の全員が居住を続けず，一部は元の村に戻った。この頃は土地が売買されず概ね尾根から谷に向けて順番に分配された。

発展期（1992年～）以降に居住したメンバーは，知り合いのツテで移住したものもいるが多くは親戚関係で移住したケースが多い。この頃になる売買による土地の取得も出てくる。

近年になると，子育てが終わった出身者がUターンし親の近隣に単身暮らしをはじめるなどこれまでにないパターンが発生している。

4.3 精霊信仰の名残を残すB家

B氏はY村については土地が広く農業条件がいいと述べている。B家は先に移住していた親戚のツテで2004年移住してきた後半の移住グループであり，Y村移住前にすでにキリスト教に改宗して精霊信仰の祭壇を破棄している。にもかかわらず，男女別の部屋にそれぞれ囲炉裏を持つ集落でももっとも伝統的な（精霊信仰の時代の）特徴を保持した竹の家に居住している。子は成人独立済みであり現在は夫婦2名で住んでおり築年数は18年となり竹の家ではかなり長い部類である。現在の暮らしについては竹の家は涼しく生活習慣に合うと述べており，息子が同居する気なら竹の家を拡張する意欲も持っていたが息子はF-CB造家屋を新築したため増築の予定はない。息子はB氏たちのための個室も設けているが，蒸し暑く，生活習慣に合わないため住む気はないと述べている。

4.4 初代リーダーであるY家

独立したアカ族の村成立以前の初代リーダーであったY氏の家である。敷地内に娘がUターンして単身用の住居を構えている。

Y氏は，現在の村では最長老の部類にあたる年齢（1941年生）である。ミャンマー国軍と戦うラフ族の徴兵から逃げて出生地から逃避した。最初の移住先は3世帯からスタートしたロゴ村であり，その後同村は30世帯に増えと手狭になったことからY村に移住している。移住時期は1989年で村の発展期直前に移住したため最古参グループではないが，中国語を話せたためY村が独立した村になる以前にアカ族のリーダーとして先住の中国人たちとの交渉を担当することとなった。その後， Y村が独立した村として成立した際も副村長を務め，半年だけ村長を務めた。移住後20年ほどの2009年に竹の家から木造高床式に建て替え，高齢のため2019年減築し高床から平家に変更して暮らしている。さらに，子供が独立し夫と死別した娘がUターンしてきており隣接する敷地に単身戸建てを建てて居住している。年齢的にもっとも未来を先取りしている家族と考えることができ，今後のY村にもUターンが発生する可能性を示唆している。Uターンに当たって単身用戸建てが選択されたことは若年層の竹の家独り住まいの風習から続くY村の住まい調達の即応性，

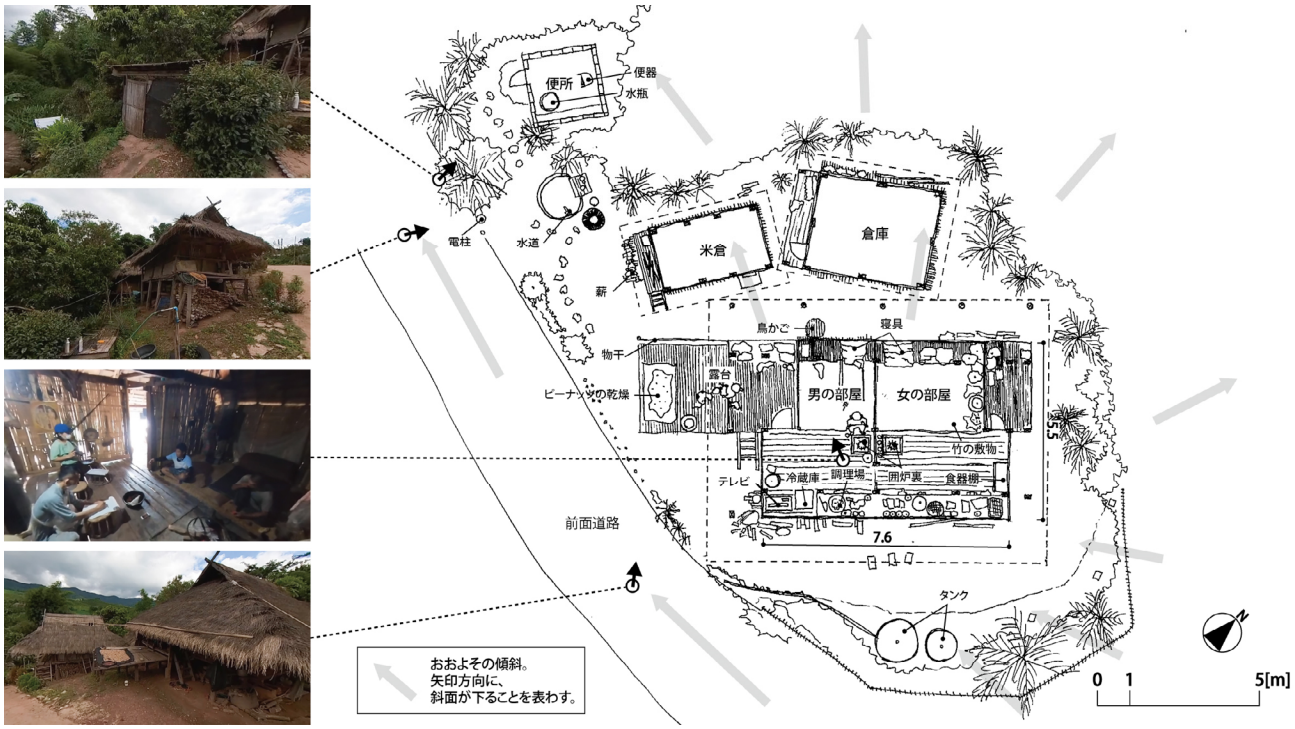

図 4-1 B 家の配置図兼平面図

柔軟性の高さを示していると言える。材料についても合板壁から竹の根太など伝統的式とは異なる組み合わせとなっている。このようなケースでも新築の際は村人の作業協力が得られている。

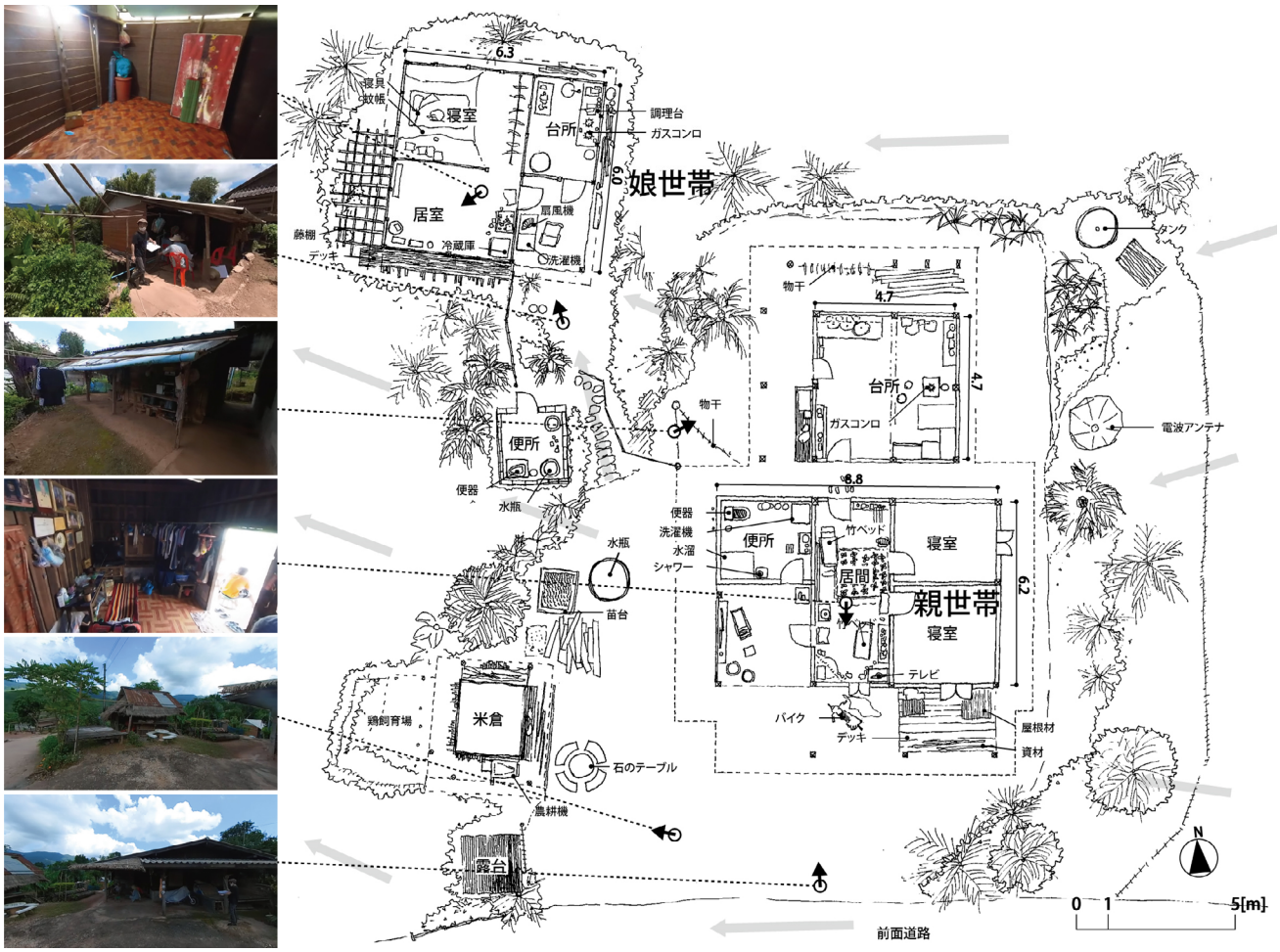

図 4-2　Y 家の配置図兼平面図

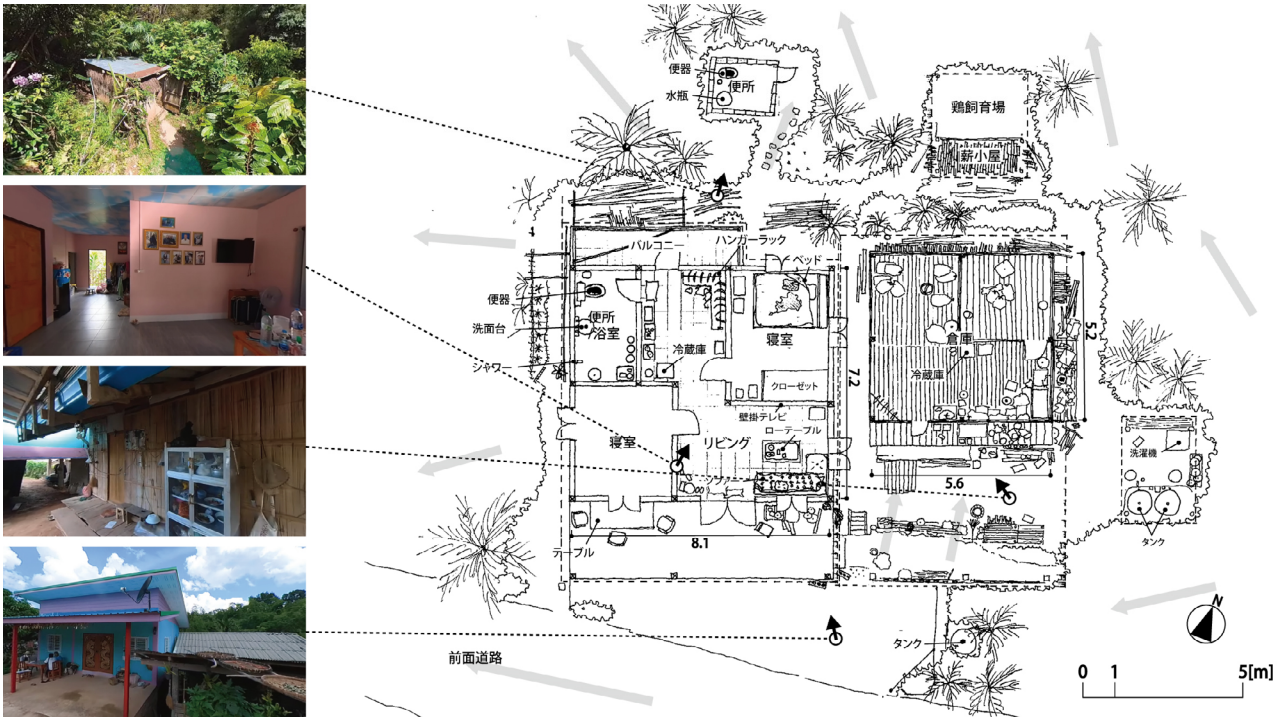

図 4-3　R 家の配置図兼平面図

4.5 出稼ぎにより新築をしたR家

隠居した母R氏一人に子供世代が同居している。

2022年に新築されたF-CB造家屋である。末娘の三女が出稼ぎして得た資金で建築された。水色の壁に柱部分は紫と赤というコントラストの強い色使いでドアは竜の装飾という村の中では異質な意匠となっている。一方で，台所小屋などは Y村で一般的な竹壁，木床を使ったものである。年長者の母は，F-CB造家屋について蒸し暑いという理由で不満であるが子供世代の意向に従った形である。母の要望のため今年東屋の建築が予定されている。

5. 考察

5.1 急変する集落景観

5.1.1 F-CB造の普及

聞き取りにより各家庭の家屋の変遷を調べたところほぼ全ての世帯で移住直後は竹の家を短期間で建て，5-10年程度住む傾向が見られた。竹の家に一定期間住んだ後は，タイ人様式の木造家屋に建て替えて10年程度過ごした後，出稼ぎ等を経てF-CB造家屋に建て替える。竹，木造，F-CB造の流れで変化している。竹の家からの木造家屋やF-CB造家屋への建て替えの理由も概ね共通しており，葺き替え労力が捻出できなくなったことや雨漏りの心配から解放されたい，子供が帰省しやすいように個室をつくるため，の三つが語られた。従来，家族内で一定年齢に達した子供は村内で竹の小屋を建てて独立することが多く，現在でも親の家の敷地内などに一人用の小屋を建てるケースもあるものの，現在の子供世代の多くは通学や出稼ぎなどで村外にいることが多い。このため日々のメンテナンスが必要な独立した竹の小屋ではなくF-CB造家屋に個室を用意する傾向が顕著である。とはいえ，村内で親から独立したり離婚で家を出る際にまずは竹の家を建てるケースも見受けられ，現在でも竹の家の新築は行われている。

竹の家の新築は移住や村内独立などいずれでも村の共同作業として行われるため家主にとってハードルが低いものの，メンテナンス作業は各家族で対処しなければならないことが多い。日本での茅葺き屋根葺の結いのような，共同作業性が見受けられなかった。このため怪我の後遺症等で維持のための現場作業が難しくなれば竹の家の維持の断念に直結する。そうでない場合においても手間のかかる茅屋根の維持負担が様式変更の主要理由の一つになっている。

竹の家の維持をやめ，より耐久年数の長い建築材料を採用する家族が増える一方で，村人は竹の家は涼しく快適であり，F-CB造家屋は日中は暑くて快適ではないという共通認識も持っている。実際に畑で作業している以外の日中はF-CB造家屋の室内ではなく，竹の東家もしくは軒先で過ごしていることが多い。室内で過ごすのはもっぱら夜である。

F-CB造家屋を建てた家族も，台所だけは風通しのよく掃除のしやすい竹の壁や床あるいは木造で小屋をつくるケースが多く，母家をF-CB造で新築した直後にも余裕ができ次第，竹の東家を作りたいという希望がしばしば聞かれる。結果，日中は道沿いの東家や軒先で休憩している住民が多い。このため移動のたびに誰かに遭遇する確率が高い空間環境である。実際に調査滞在中，我々は移動する際に誰かしらに出くわしアカ語で挨拶を交わしたし，東家に人が集まりおしゃべりが発生している場面をたびたび目撃した。竹の東屋の存在はY村における住民同士の遭遇頻度，コミュニケーションの密度に大きな影響を与えている可能性がある。

次に，なぜスムーズにF-CB造家屋が普及しつつあるかについて述べる。一つには，タイでは規格化された大型のパーツが流通しているという環境要因がある。F-CB造といっても，全てが日本でブロック塀をイメージするようなブロックで構成されているわけではなく，柱状のプレキャストパーツなども専門店で入手可能である。ブロックに加え，プレキャストパーツを組み合わせて建築するため，家屋の寸法に関してはパーツに規定されている部分が大きい。このように既存のパーツを組み合わせて建てるやり方は，太さの異なる複数種類の竹を適材適所で組み合わせて感覚的に建築する従来の竹の家の建築の感覚に近いのではないかと考えられる。筆者らが村人と一緒に竹の家を建てる経験を複数回重ねてきて最も印象深いことの一つは，間取り図的なものも含めて図面も書かず会話だけで家を建築していくことであった。F-CB造家屋はこのような竹の家に近い感覚で建てられるとするとY村のように都市部から遠く離れた場所でも近場で職業大工が見つけやすいという点で有利であろう。タイ語を話せない年配者も多いアカ族にとって都市部のタイ人の専門業者を都市部から呼んでくることは，費用，交渉難易度の面でそう簡単ではない。なお，F-CB造でも塗りで目地を消し塗料で塗装してしまうため初見では型枠で打設したように見える。

5.1.2 失われつつある伝統建築

1999年に始まったCB造およびF-CB造の家屋の建設は，村人が自ら家を建てるという文化，その機会を少しずつ失わせるきっかけとなった。伝統的な材料や道具から，それらの技術について記述する。

茅の利用は，屋根の一部に継続されている。日本の茅場においては，年に1回野焼きが行われる。それには，雑木の生育抑制，肥料の供給，害虫の駆除機能がある。また，茅の管理においては株分けなどによって，栽培量を増やす場合もある。Y村の茅屋根の寿命は長くて3年であり，葺き替えのサイクルは早い。現代の暮らしにおける，茅屋根の維持管理（茅場の管理，パネル上の屋根材への

加工，葺き替え）の負担は大きい。しかし現在，村で採れる茅の量は減少しているが，その対策はとられていないようである。焼畑の衰退は，茅の生育にも影響があると推測する。今後，消失の可能性が高い，技術の1つと考えられる。

木材は，母屋や付属の小屋において，現在も使用率が高い。しかし，農地拡大による森の減少によって，建材に適した木の入手は村内で困難になっている。対策として，2023年に5万本の植林が計画されている。森と農地の境界を定め直すため，個人の農地の一部は村の共有地に変更された。また，増改築や自然災害による家屋の倒壊で発生した木の古材は，保管され再利用されるなど，大切に扱われている。建材としての木の利用は，今後も継続することが予想される。しかし，その入手方法は市場に頼ることも考えられ，森と住まいつくることの間に培われた，文化と技術の継承は困難になりつつある。

大工道具に関して，伝統的家屋の建設では，市場で購入されたノコギリ，ノミ，カナヅチ，チェーンソーが使用されている。また，古くから使用される代表的な道具は，村内の鍛冶屋（バジ）によってつくられた，ナタとオノである。オノの所有者数は村内でも少ない。伝統家屋の建設減少に伴い,伝統的な道具の生産･使用技術も，継承が困難になりつつある。一方でナタは農業，調理などにも使用され，所有者が多いのが特徴である。

5.2 社会-空間系の現代的様相

5.2.1 居住地の安定化と出稼ぎ

前述のコスト面，実現難易度での有利さのため，F-CB造家屋は数年の出稼ぎで資金を調達しうる相場観となっている。出稼ぎと言っても食うために止むに止まれずという性質のものというよりは，農業等の村での生業では買えないものを買うためのまとまった臨時収入をつくる側面が大きい。出稼ぎはあらかじめ目的が決まっているため，出稼ぎ状況が分かれば建て替え発生カ所や時期の大まかな予測が可能である。

農地の広さ，紛争リスクからの解放などによりY村の生活環境は各住民の以前のものに比べ安定している。これが耐久年数の高い家を求めることを可能にしている。この傾向について特筆すべきことは，Y村においてF-CB造の職業大工が登場し，村内で建築中の物件が現れてきていることである。鍛冶屋と商店ぐらいが専門的職業になっていたY村においてはこの職業大工（F-CB造家屋）の出現は大きい変化と言える。

5.2.2 都市部への居住選択の広がり

出稼ぎ以外にも，進学率の向上により村を離れる人口は増加している。とくに高校，大学進学のために都市部の寮に生活の拠点を移す場合が多い。

村人のとくに高齢者には，無国籍の人もいる。国籍がない場合，職業の選択肢が限られ，また賃金に格差があるなどの不自由が生じている。それ故に，農業に従事するしかないという現実があった。今現在，若い世代の国籍取得率は上昇しており,その問題は緩和されつつある。

また，進学率の向上，職業選択の多様化により，チェンライなどの都市部で土地を購入し家を新築する村人もあらわれ始めた。今は単身で一時的に生活拠点を村外に置く場合が多いが，世帯ごと都市部へ流出する流れも近い未来に増加するかもしれない。

5.2.3 信仰の多様化

1999年には村全体がキリスト教に改宗した。新しい宗教は，伝統儀礼のための金銭的負担，時間的拘束から村人を解放した。しかし，それにより共同体としての結束が緩み，相互規制が十分に働かなくなって個人主義的な行動が増えたことが推測される。精霊信仰においては，「自然に悪いことをすれば自分に返ってくる。自然を守ることは大切。自分が食べる分だけを自然からいただく。他の人の食べる分を奪ってはいけない」という教育が年長者から若者へ行われたが，今はないという。実際に村で発生した一部の者による川魚の乱獲や，村民間での窃盗事件などは，このことと無縁ではないと考える。

2022年現在，伝統的な魔除けの装飾を作り，家の入り口に吊るす高齢男性がいる。これは covid-19の感染拡大を受けてのことだという。キリスト教信仰の上で，本来禁止される行為ではあるものの，改宗時の祭壇の破棄ほどの大きな抑制力は発揮されていない。このように，個人間の信仰において日常的行為に関してはそこまで厳格ではない。また，当初は村人全員一致でのキリスト教改宗を行なったが，前述の通りキリスト教から仏教への改宗も発生しており，村内の信仰は多様化している。信仰と村の結束力の関係，それによってもたらされる空間の変容がこれからも現れると思われる。

5.2.4 農法の変化と諸問題の発生

政府の規制により，伝統的な焼畑を続けることには困難が伴う。現在，農地の拡大がいくつかの問題の原因となっているが，村ごとの移動が難しいため焼畑による地力の回復を待つには農地エリアを拡大せざるをえなかった事情があったと推測される。また，チェーンソーの所有は，森林の減少と農地の拡大と加速させた。拡大した農地の作業効率をあげるため除草剤の使用がはじまり，除草剤は農業従事者への健康被害，土壌や河川へも影響を及ぼしている。出稼ぎにより農地の拡大に対して，人手不足も生じており農地の管理がままならないという事態にも繋がっている。現在，管理できない農地を村外に住むモン族へ貸すという解決策もとっているが，モン族による農作物の窃盗という新たな問題が起きている。また,拡大しすぎた農地を森に戻すための植林が計画され，河川の水質改善のため堰を作る試みが村人によって始められている。

6. おわりに

6.1 結論

本稿ではY村において，集落全体・B通りという2つのスケールで，これまで約30年間のダイナミックな変容を明らかにした。本稿の冒頭において社会-空間系という仮説的な視座を示したが，Y村における社会的な出来事はことごとく空間的にあらわれていたし，調査内容や作成データを社会と空間とに峻別することも困難であった。これらを一体の系として捉えその全体像に迫るアプローチは，有効であったと筆者らは考えている。

Y村は地理的には独立性の高い集落であるが，社会-空間系は決してここで閉じてはいない。村の成立からして複雑な国際情勢と関係しており，また特に1992年以降に外部から技術や思想が流入し，村を大きく変えている。近年は出稼ぎを通じて，国外とのつながりも強まっている。そしてこれらの出来事が，B通りの各世帯，個々人の生のあり方にまで色濃く刻まれていることを見た。

ただし地域社会は，外部の影響にただ飲まれているだけではない。コンクリートブロックという新建材を用いてもなお竹のようなスピード感で家を建てたり，分棟形式の建物ごとに材料を使い分けたり，出稼ぎが増える中でもスマートフォンにより従来のコミュニケーションの密度を確保したりするなど，この村あるいはアカ族の独自の方法で受容している様子が伺える。今後，伝統技術はますます失われていく可能性が高いが，それでも社会-空間系の根底にある風土や思想は，しなやかにその姿を保ち続けるということも考えられる。

発展途上国，特にその周縁部における現代的現象は，西洋中心の進歩史観的な見地，あるいはオリエンタリズム的な目線も相俟って，「遅れてきた近代化」という枠組みで捉えられることも多い。また後進国が一足飛びに最先端技術を享受する，リープフロッグ現象として読み解く向きもある。しかしY村が辿っている時間は決して近代の後追いなどではなく，やはりこの地域独自の過程である。いわば，我が国などの社会と「並行して進む現代」とでも呼べるものではないだろうか。

6.2 今後の課題

まず，第2回調査で得られた豊富なデータを元に，さらなる分析を進める。**図3-1**はあくまで模式的な配置図であるので，測量データを元に正確な図面を作成し，**図2-3**の立体ベースマップとの統合も図り，空間的分析を深める。村全体の94戸について，またB通り26戸についての計量的な分析も可能である。

そして本稿で得られた2022年の状況を起点とし，10年間の研究を進めるため，まずは次なる調査を計画する。各年の変化を正確に記録する他，本稿で着目した建築材料の選択（建築生産システム），技能の継承，海外への出稼ぎなどについては，文献調査も含めて，さらに深堀りをしたい。出稼ぎ者から，あるいはテレビやインターネットなどのメディアからもたらされるグローバルな情報の影響にも，注視する必要がある。そして具体的なデータを元にしながら，社会-空間系一般を理解し，記述するための理論構築や，研究方法論の確立も目指している。

＜謝辞＞

スミオ・アソー氏には，研究コーディネーターとして通訳や住民との調整などに奔走いただいた他，自らもユースック村の動向に関する豊富な知見を提供くださった。ユースック村の住民の方々には，ヒアリングや家屋内外の調査に快くご協力いただいただけではなく，実測調査の補助や，食事の提供などでもご尽力をいただいた。また第1回調査では北紘子氏，第2回調査では櫻井康平氏に同行いただき，櫻井氏においては**図4-1～3**の作成など成果のまとめにおいても多大な貢献をいただいた。以上，記して感謝する。

＜注＞

1) 2020年3月に2回目の調査を行ない，2019-2020年を10年間の調査の起点とする計画であったが，新型コロナウイルスの影響により，1回目と2回目の調査の間に3年間のブランクができた。ただそれによって2回目の調査では，3年間での大きな変化を目の当たりにすることもできた。それにより2回目調査では，調査内容を現地で一部変更し，特に建物の建て替えや新築と，海外への出稼ぎについて詳しく調べることとした。
2) ワークショップツアーや本研究の調査自体が，村の社会-空間系を変える要因の一つとなっている。つまり観察者が，観察対象の社会-空間系に含みこまれている。文化人類学者たちが常に頭を悩ませてきた問題であるが，筆者らもそのことは自覚して研究を進める必要がある。
3) webで公開しており，ブラウザ上で回転して見ることもできる（http://utsuwa.cc/yusuk/yusuk_basemap_browser.html）。ただし測量対象は母屋に限られ，また測量漏れなどもあったため，この時点では**図2-3**は未完成である。
4) 国籍を持つアカの世帯が40世帯を超えたため，中国軍人世帯とは別にアカだけの村として独立。当時のタイにおいて，国籍所有者40世帯に満たない居住コミュニティは村として認められなかった。

＜参考文献＞

1) アレグザンダー, C.：形の合成に関するノート，中埜博訳，鹿島出版会，2013，p.4.
2) ブローデル, F.：地中海I 環境の役割, 浜名優美訳, 藤原書店, 1991. 他
3) 成城大学民俗学研究所：山村生活50年 その文化変化の研究 昭和59年度調査報告，1986.／同昭和60年度調査報告，1987.／同昭和61年度調査報告，1988.
4) 瀝青会：今和次郎「日本の民家」再訪，平凡社, 2012.
5) 清水郁郎：家族とひとの民族誌—北タイ山地民アカと住まいの相互構築誌，風響社，2005.
6) 新井清水・畑聰一：アカ(ロイミ)族,メーモン村における住居空間の構成法に関する考察 ：タイ北部,チベット・ビルマ語派の集落・住居に関する研究 その1，日本建築学会計画系論文集, No.67, Vol.551, pp.99-106, 2002. 他
7) 早川貴光・伊藤香織・Andrew Burgess：北タイ山岳民族の住居にみられる都市化の影響に関する研究:−チェンライ県のアカ族集落を対象として−，日本建築学会技術報告集，No.24, Vol.56, pp.339-344, 2018.
8) 北雄介：GPSとGrasshopperを用いた集落の三次元ベースマップの作成手法，日本建築学会技術報告集， No.28, Vol.69, pp.1048-1053，2022.
9) 諏訪哲郎：タイ北部アカ族文化の1991-1997間の変貌--センチャルン・マイ村の場合,学習院大学文学部研究年報(44), pp.147-166，学習院大学，1997.